

# ICG Annual Meeting 2018を開催して

東京大学 生産技術研究所

井上 博之

## Hosting ICG Annual Meeting 2018

**Hiroyuki Inoue**

*Institute of Industrial Science, The University of Tokyo*

### 1. はじめに

2018年9月23日から26日まで、パシフィコ横浜でInternational Commission on Glass (ICG)の年会を開催しました。多くの方に参加していただき、また、多くの企業や助成会からご支援を賜ったことを、開催の準備を行ってきたひとりとして感謝申し上げます。また、盛会の内に閉会することができたことをご報告いたします。

登録者数は、国内376名、海外212名の合計588名でした。29か国からの登録者の内訳を表1に示します。この内、88名が学生でした。発表は、基調講演2件、Keynote講演4件、Gottardi賞の受賞講演1件、招待講演67件、口頭発表144件、ポスター発表112件の合計330

件でした。ICGの会議は、大会が3年に1度、その間の年は年会が開催され、大会の参加登録者数は1000名程度で、年会はその半分の規模で開催されています。32か国の代表組織がICGの会員となっていて、欧州の会員組織の数が最も多いこともあって、会議の開催は、欧州を中心に考えられています。参加された方も多いことと思いますが、日本での開催は2004年の京都の大会以来であり、筆者も含めて、今回の開催の作業を担当した者の多くが開催の担当は初めてでした。少しでも開催に関する情報を残して、今後の開催で参考にしていただければと思います。全体の構成は、会議の開催招致、開催の準備、開催の順にその概要を述べます。

### 2. 開催招致

日本セラミックス協会のガラス部会では、Council委員、Steering委員、CTC+Council委員の3名をICG委員としています。筆者が2012年6月にCTC委員を前任の松岡純先生から引き継ぐときに、日本は、2017年あるいは2018

---

〒153-3505  
東京都目黒区駒場4-6-1  
TEL 03-5452-6315  
E-mail: inoue@iis.u-tokyo.ac.jp

表1 国別登録者数

Country/Region	登録者数
Belgium	10
Brazil	4
Bulgaria	1
China	29
Croatia	1
Czech Republic	9
Denmark	5
Finland	2
France	19
Germany	24
India	1
Italy	8
Japan	376
Liechtenstein	2
Malaysia	1
Netherlands	6
Portugal	1
Russia	6
Singapore	3
Slovakia	6
Slovenia	2
South Korea	13
Spain	5
Sweden	1
Taiwan	3
Thailand	9
Turkey	2
UK	15
USA	24
総計	588

年の年会の開催に立候補することを既に意思表示をしていること、その開催地は東日本で検討することを申し受けた。その後、2017年以前の開催地を考慮して、2018年の開催を目指すことにした。翌年の2013年に、中尾泰昌・前原輝敬（AGC）、矢野哲司・岸哲生（東工大）と筆者・増野敦信（東大）の6名で準備委員会を発足した。また、招致までの種々のサポートをしてもらうために、学会開催支援の経験のある3社から、会社の概要や開催見積書などの説明を聞き、その中の1社を選定し、この後、様々な作業の支援をしてもらうことにした。これ以降の開催招致の作業は、我々の準備委員会とコンベンションサポート会社による活動になった。

開催年より2つ前の会議のCouncil Meetingで開催計画を口頭で10分程度説明し、立候補地

が複数あれば、投票を行って、開催地を決定する。この2か月ほど前までに開催の申請書（A4 10頁）を提出する。この申請書には、開催の概要の後に、主催する組織の説明、会議の主題、開催のための組織、登録料、開催地、開催施設、周囲の宿泊施設、会場までの交通、会議の日程などを記載した（"The criteria for selecting the location of the ICG annual Meetings and International Congresses"に申請の骨子が記載されている）。2018年に年会を開催するためには、2017年の年会:Istanbul、2016年の大会:Shanghaiの前の2015年の年会:Bangkokのときに、申請書を提出して、口頭で説明する必要がある。このために、2014年は、ほぼ毎月準備委員会を開催し、主題は、"The Innovative Glasses and Technologies; Contribution to Sustainable Society"として、これを支える3つの柱を、(1)"Innovative Glasses for Intelligent Living", (2)"Innovative Processes and Technologies for Energy Saving", (3)"Innovative Glasses and Processes for Radio-Active Waste Management"とした。また、横浜周辺の会場を視察して、パシフィコ横浜と決めた。開催の4年以前に予約できる会場は極めて少なく、他の選択肢はなかった。横浜に関する情報は、横浜観光コンベンション・ビューローが最も確かな情報を持っていることがわかった。日程は、大学の講義のない9月とし、会期は、4日間で、初日の午後にTCの会合、夕刻にWelcome Party、2日目の午前が、1会場で開会式を開き、午後からTechnical Sessionを5会場で並行して行い、3日目もTechnical Sessionを継続し、午後にPoster sessionを行い、夕刻にBanquet、最終日の昼に閉会式を行い、午後は、Excursionの予定であった。当時、想定していた参加登録者は、400名程度で、一般の登録料を50,000円（早割り）と設定した。登録費を抑えて、海外からの登録者の数をできるだけ増やしたいと考えていた。実際は、4日目の夕刻までTechnical Sessionを6会場で並行して行う必要があっ

た。2014年のCouncil委員会で2017年の年会を招致したSisecam (Turkey)の説明用資料は大変参考になったが、口頭説明の資料の準備は捗々しくなく、9月に入ってから、準備していた記憶がある。

招致には、Councilの委員が行きたい場所に行ることが重要であり、会議が、欧州、アメリカ、アジアを偏りなく巡回するように、考えて立候補すれば、他の地域の国と競合した場合、仮にそのとき招致できなくても、次の機会も立候補すれば、招致できる可能性が高くなる。同じアジアの国と競合し、招致できないと、1周巡回するのを待つことになる。2018年の年会開催には、フランス、ポーランド、日本が立候補した。特にフランスは、International Conference on the Physics of Non-Crystalline SolidsとEuropean Society of Glass Conferenceとの共催で、投票前の感じでは、フランスが圧倒的に有利に思えた。我々が招致できたのは、運がよかったのだと思っている。

### 3. 開催準備

ここまでの準備委員会を解散し、委員のメンバーを大幅に増やして、開催地組織委員会(委員長:矢野哲司)と科学委員会(委員長:安盛敦雄)に分かれ、開催のための作業を行った。筆者は、両委員会の合同運営委員会で進捗状況を聞いていたが、その内容は多岐にわたり、詳細は、各委員長や委員に聞いていただきたい。ここでは、2015年の末の業務スケジュール管理表から、開催地組織委員会の主要な作業項目とその時期を表2に、科学委員会の主要な作業項目を表3に転記した。特に前者は作業の種類も量も膨大であり、委員への負荷が高いことがわかるであろう。VISAが必要な国の参加者への対応など、表に挙がっていない事項でも重要な事項があった。さらに、実際に講演申し込みでは、システムに問題があり、これらの作業を全て委員が作業することになり、作業がさらに増えてしまったことは今回の開催準備の中で大き

な反省点である。経験不足と準備不足から、問題が発生し、その対応策の検討も不十分であったことが、挙げられる。

招待講演者の選定では、各TCの国内のメンバーに推薦を依頼したために、招待講演の候補者がこれまでの年会の倍以上に多くなったが、このために、海外からも多くのTCのメンバーが参加し、会期中TCの会合も多く、良策だった。ただし、招待講演者の男女の比率には、批判があったことを加えておきます。常に予算は大きな問題で、企業からの協賛金について、産業界から支援の申し出があったことは、我々に大きな助けになったことを挙げておきます。

### 4. 開催当日

ときどき雨の降るような天候であったが、今年は台風が多く発生し、台風21号9月4日徳島上陸、台風24号9月30日和歌山上陸を考えると、この会期の設定は運が良かったのだと思う。開会式の式次第は、2017年のIstanbulの開会式をビデオ撮影し、これを参考に構成した。関係者の挨拶の後に、牧島亮男先生と島村琢哉氏(AGC)の基調講演が行われた。共に貴重な講演を聞くことができた。今年度のGottardi賞の受賞者はVISAの関係で来日できないために次回に延期となり、昨年の受賞できなかった受賞者の授賞式と講演が行われた。開会式も閉会式も打ち合わせや予行演習無しで開催しているので、彼には受賞の段取りや時間の連絡が届いていなかった。これも反省点だと思う。

会長からの要請で2017年から始まったYouth Outreach Programを実施した。若手の研究者・技術者を対象にICGの活動に参加してもらうための企画であり、留野暁(AGC)を中心に内容を検討し、ランチミーティング形式でメンターから自身のキャリアに関する口頭発表を導入し、参加者間での議論を行った。盛況で3日間の延べ参加人数は258名であった。もう一つの企画は、ICG85周年を記念して、"ICG memorial roundtable talk"として、曾我直弘先

表2 開催地組織委員会の作業項目とその時期

	項目	2016	2017	2018	会期後
総務	スケジュール管理	○	○	○	
	趣意書作成	○			
	助成金・補助金申請手続き	○	○	○	
	予算案の作成	○			
	予算管理	○	○	○	○
	決算書案作成				○
登録	登録料決定		○		
	登録申し込み方法決定			○	
	登録受付システム構築			○	
	事前受付の管理			○	
	請求書・領収書発行			○	
	当日受付運営			○	
	配布資料の準備			○	
	最終登録者報告				○
広報	1st Announcement 制作	○			
	1st Announcement 配布	○			
	ホームページの開設	○			
	ホームページ更新	○	○	○	
	ウェブサイトとのリンク	○	○	○	
	2nd Announcement 制作		○		
	2nd Announcement 配布		○		
	コングレスバッグの制作			○	
	カメラマンの手配			○	
	プレス対応			○	
募金	スポンサー募集要項作成		○		
	出展募集要項作成		○		
	広告募集要項作成		○		
	申し込み後の事務処理			○	
会場	会場予約	○			
	会場設営計画			○	
	展示会場レイアウト			○	
	映像機材の手配			○	
	コーヒープレイク・昼食			○	
	会場運営			○	
	会場アルバイト			○	
行事	ウェルカムレセプション手配			○	
	パンケット会場手配、飲食手配			○	
	アトラクション手配			○	
	開会式・閉会式の式次第			○	
	挨拶者選定			○	
	司会者の選定			○	

表3 科学委員会の作業項目とその時期

項目	2016	2017	2018
プログラムの大枠決定		○	
招待講演者の選出、内諾		○	
招待講演者への依頼状の送付		○	
一般講演の分類方法の検討		○	
講演募集要項の作成		○	
演題投稿システムの構築			○
演題投稿処理			○
査読作業			○
プログラム編成・会場割り当て			○
プログラムデータの作成・公開			○
座長候補者の選出			○
座長依頼状の作成と送付			○
予稿集原稿の編集			○
発表用インストラクションの作成			○

生を始めとして、これまでの歴代会長に登壇いただき、ICGの活動が紹介された。また、学生の発表に対して賞を設けて、10件の優れた発表を表彰し、閉会式で表彰状と共に地村洋平先生制作のガラスの芸術作品を贈呈した。

## 5. 最後に

色々に至らない事があったと思いますが、また、紹介できなかつた事項も多々あると思います。これまで開催されてきた年会と同じような会議が日本で開催できたらと考えていた準備委員会のときよりも、随分と立派な年会を開催することができたと思う。これは、招致後の2つの委員会の働きによるところが大きく感謝に堪えません。今後、少しでも作業の削減のために、登録システムや講演の申し込みのシステムを考える必要があると考えています。今回わかつた

ことは、これらのシステムは、コンベンションサポート会社が関係の会社に依頼して、新しくこの会のために構築し、納入したそうです。我々が必要とするのは、安定して使え、その後の処理に必要なデータを出力してくれるシステムです。毎年、今回よりも大きな国内会議が開催され、頻繁に国際会議も日本で開催されることを考えれば、日本セラミックス協会でこのようなシステムを構築し、使用料を徴収して、セキュリティーなどのために必要なときにシステムを更新して、継続的に使用するようにすれば、今回のように予定していなかつた多大な作業が発生する事態にはならないと考えています。最後に、この年会を契機にガラス材料の分野の科学と技術が益々進展すること、近い将来、このような会議がまた日本で開催されることを期待しています。